

## 【研究ノート】

# 「宗教的ではないがスピリチュアル（SBNR）」という 思想について\*

岡部光明<sup>#</sup>

2020年7月

## 【概要】

米国では、ここ 20～30 年間、そこでの宗教の動向ないし精神事情を理解するに際して「宗教的ではないがスピリチュアル」（spiritual but not religious: SBNR）という表現が用いられる場合が増えている。本稿では、その実情、背景、意義、先行きを論じるとともに、日本にとっての含意を考察した。その結果、(1)アメリカ人は生きる動機の追求を宗教教団に所属するよりもむしろ個人的に追求する傾向が強まっている、(2)その背景には新自由主義や個人主義の風潮がある、(3)スピリチュアリティ（精神性）には現代心理学などの知識や知恵が活かされている面がある、(4)こうしたスピリチュアリティという視点はとりわけ医師・看護師・カウンセラーなどヒューマン・ケアに関連する専門職によって重視されている、(5)日本でもスピリチュアリティを重視する自己研鑽の思想があり今後の展開が注目される、などを論じた。

**キーワード：** スピリチュアリティ、宗教、Spiritual but not religious (SBNR)

---

\* 本稿は、岡部（2020a、2020b）を補完する研究ノートである。

# 明治学院大学国際学部附属研究所名誉所員、慶應義塾大学名誉教授。 <http://www.okabem.com/>

## はじめに

米国では、伝統的にキリスト教が社会の精神基調とされてきたが、1970～80年代以降、国民がキリスト教会に所属しない傾向が次第に強まってきている。こうした実体を捉えて2000年に刊行された書籍『Spiritual but not Religious（宗教的ではないがスピリチュアル）』（Erlandson 著）が刊行され、その書名（ないしその頭文字の省略語である SBNR）がその後、米国の宗教事情ならびに精神事情を表すものとして広く人口に膾炙するようになっていく。本稿では、その実情を簡単にたどった後、宗教とスピリチュアリティの関係を整理するとともに“SBNR”の意義を明らかにし、そして日本社会の場合についても若干の考察を加えた。

以下、1章「米国における“SBNR”傾向の広がり」では、そうした表現が急速に一般化した実情や背景などを述べる。2章「スピリチュアリティ、宗教、そして SBNR」では、宗教とスピリチュアリティを対比するとともに、“SBNR”の意義を明らかにする。3章「SBNR の評価と展望」では、SBNR の評価とその先行きを展望する。最後の4章「日本における含意」では、日本の宗教事情に対する含意を述べる。

## 1. 米国における“SBNR”傾向の広がり

「宗教的ではないがスピリチュアル」（Spiritual but not religious：略して SBNR）という表現<sup>1</sup>は、自分のスピリチュアル（霊的ないし精神的）な成長にとって、組織化された宗教教団に所属することが唯一あるいは最も大切な方法であるとは考えない生き方を自己表現する用語（あるいはその頭文字語による表現）である<sup>2</sup>。

この用語が一般化したのは、2000年にスピリチュアル・カウンセラーによる書籍『Spiritual but not Religious：A Call to Religious Revolution in America』（宗教的ではないがスピリチュアル：アメリカにおける宗教革命への呼びかけ。Erlandson：2000）が刊行されたことが契機になっている。この書物は、アメリカ人のキリスト教会からの離脱傾向、その理由、対応方向を記述したものであるが、刊行後には、その書名（略して SBNR と表現される現象）がアメリカの宗教風土を表現する

---

<sup>1</sup> この表現とは別に「宗教教団には所属しないがスピリチュアル」（Spiritual but not affiliated：略して SBNA）と表現されることもある（脚注2を参照）。

<sup>2</sup> 以下の記述は、インターネット上の百科事典といえる Wikipedia “Spiritual but not religious” に相当依存している。なお、Wikipedia（特にその英語版）は比較的信頼が置ける文献といえる。その理由は、岡部（2019：付論2）を参照。

新造語として広く用いられる状況をもたらした。

## 米国の実情としての SBNR

確かに米国では、キリスト教会ないし宗教組織に所属しない人が近年顕著に増加している。2012年の調査（Pew Research Center 2012）によれば「特定の宗教に所属していない」とする人は、2007年には米国人の15%がそう回答していたが2012年には20%に増加している（30歳以下の成人に限定すると3分の1にも達する）。その後の同調査（同 2019）によれば、2018-2019年にはそれが26%にまで上昇している。

一方「特定の宗教に所属していない」人を取り出し、いくつかの項目につきその内容をみると（Funk and Smith 2012:2）、68%が「神を信じる」と答えているほか、58%が「大地や自然との深いつながりを感じる」としており、37%が自分は「宗教的ではないがスピリチュアルである」と回答、また21%が「毎日祈る」としている。米国では、まさにSBNRという事実がこのように統計的にも明らかになっている。

また、SBNRに関する網羅的な研究書の一つである Mercandante (2014: 1-3) をみると、「どの宗教にも属さない」という人が傾向的に顕著に増加していることがここでも示されている。その比率は1972年には7%だったが、1990年に8%、2000年14%、2010年18%、そして2012年には少なくとも20%（各種調査で幅があり19~25%）にも達している。それと同時に、アメリカ人は生涯のうちに少なくとも2つないし3つの宗教集団に所属するようになっていくとする調査もあると指摘、所属する宗教団体への忠実度が低下していること（同）にも言及している。

## SBNR に傾斜する理由

宗教的 (religious) とスピリチュアル (spiritual) は、従来、ともに宗教の多様な側面を表す用語として同義的につかわれてきた (Mercandante 2014: 5-6)。しかし近年は、「スピリチュアリティ」という表現は個人の「心-身体-精神」という内面的生活が良い状態にあることに意味の重点が置かれる場合が多くなっている (同: 4-6)。これに対して「宗教」は、組織化された次元ないし共同体の次元を意味する用語として使い分けられるようになっており (同)、両者は使い分けられる場合が多い。つまり、宗教的であるという表現は、何らかの組織への所属を示唆するのに対して、スピリチュアルであるという表現は、生きるための最も深い動機を個人的に追求

し、個人的がそのために実践するという語感を持つ点に特徴がある。

このため、個人の自由や自律性を重視する社会（米国社会等）では、組織化されたものを意味する宗教という用語が次第に敬遠される一方、本来私的な感情および経験であるスピリチュアリティという表現が次第に好まれるようになったとされる<sup>3</sup>。

このような SBNR という動向が、近年米国では世間一般でもまた学会でも注目されるようになってきている。その理由は、SBNR が単に宗教に関連する現象というよりも、米国社会全体としての動向を反映した現象だからである。すなわち米国社会が、一般に制度的拘束からの開放(deinstitutionalization)、個人主義化(individualization)、グローバル化(globalization)といった傾向を強めていることを反映しているからである<sup>4</sup>。

さらに、スピリチュアリティという用語が広まった理由として、次の二つの事情も影響している。その一つは、スピリチュアリティには、人間の心身の健康（ストレス緩和、感情のコントロール、終末医療など）を支援するという機能があることから、医療・福祉・心理療法といったヒューマン・ケアに関わる専門職（およびその関連学会）による関心が高まっていることである（後述）。これらの職業上の具体的なニーズに対しては、ハードルが高い宗教よりもスピリチュアリティによって対応できる可能性が大きいので、その面からこの用語が好まれている。

いま一つは、1998年にWHO（世界保健機関）が新しく提案した「健康」の定義において、従来列挙されていた3項目に加え、人間の精神生活が健康に大きな影響を持つものとして「精神的」(spiritual)という要素を加える提案がなされたことである(星野ほか2010:594)。すなわち、健康の新定義として「健康とは、身体的(physical)、心理的(mental)、*精神的(spiritual)*、および社会的(social)に完全に良好な動的状態であり、単に疾病または病弱でないことではない」とすること(斜字体部分の追加)が1998年のWHO執行理事会において総会提案することが決定された。しかし、その後のWHO総会では、現行の健康定義は適切に機能しており、審議の緊急性が他案件に比べて低いなどの理由で審議入りされず、採択が見送られたままとなり(臼田ほか2000)現在に至っている<sup>5</sup>。しかし、WHOにおけるこうした一連の動向は、

---

<sup>3</sup> 脚注2を参照。

<sup>4</sup> 脚注2を参照。

<sup>5</sup> この提案が今日までWHO事務局預かりのままになっている理由は、機構改革の優先、緊急性の欠

“spiritual”という言葉が現代人のウェルビーイング（幸福）にとって重要な要素であることを印象づけ、宗教や信仰とは離れた次元でスピリチュアルという用語を普及させる一因となった。

## スピリチュアリティ関連書籍の刊行増加

宗教あるいはスピリチュアリティないし広く捉えた自己啓発に対する関心の高まりは、米国におけるそれに関する書籍の刊行においてもうかがわれる<sup>6</sup>。ちなみに、上掲書（Erlandson：2000）の後に刊行された書物のうち、書名にその表題（SBNR）を含むものを筆者がウェブ検索したところ、相当数に達することが判明した（**図表 1**）。

そうした書物には、当然ながら多様な性格のものがあるが、宗教よりも多様なスピリチュアリティを薦める一般向け書物（同図表、C、E、G、H）ないしその方法論（同、I）が多いのが第一の特徴である。また、スピリチュアル（精神的、霊的）という発想は東洋的なものであるとして、それを解説する書物（同、F）もある。そして、SBNR という動向がアメリカ社会にどの程度観察されるのか、あるいは SBNR の実体はどんなものか、に関する研究書（同 B、D）も見られる。

近年のスピリチュアリティないしそうした運動（SBNR）の推進においては、多様な要素ないし動機が含まれている。これを理解するため、Mercandante（2014：35-67）は 5 つのタイプの人関わっているという理解を提示している。すなわち（1）宗教教団への異議申し立て者（個人のスピリチュアリティにとって教団は有益でも必要でもないと主張する者）、（2）宗教ないしスピリチュアリティは必要に応じて活用すれば良いとする者（健康増進・ストレス軽減など個人のウェルビーイングにとっての治療手段とみなす者）、（3）新しいスピリチュアリティの探検者（精神的な最終目的地があるわけではないが好奇心から常に新しいものを求める者）、（4）新しい宗教的アイデンティティの探求者（最終的に帰依できる精神的な落ち着き場所を求める者）、（5）精神的な新天地を求めてきたもののそれに同化しきれていない者（いわば精神的な移住先に安住できていない者）、である。確かに、SBNR にはこうした多様

---

如などのほか、おそらく最大の要因として“spiritual”について共通理解がないこと（spiritual と mental の違い、spiritual と religious の違いについて多様な意見があること）、また本提案が東地中海地域事務局（つまりイスラーム文化圏の委員）から出たこと、に求められるとされる（棚次 2016:30）。

<sup>6</sup> 自己啓発に関する幾つかの代表的書籍（米国における書籍を含む）の内容、特徴、評価については、岡部（2020a）を参照。

図表1 書名に“Spiritual but not religious (SBNR)”という語句を含む英文書籍の例

	書籍名（刊行年）	著者	書籍の性格・概要
A	<i>Spiritual but Not Religious: A Call to Religious Revolution in America</i> (2000)。「スピリチュアルだが宗教的でない：アメリカにおける宗教革命への呼びかけ」	Sven Erlandson (スピリチュアル・カウンセラー)	・新造語 SBNR の端緒となった書籍。アメリカ人のキリスト教会からの離脱、その理由、対応方向を記述。
B	<i>Spiritual, but not Religious: Understanding Unchurched America</i> (2001)。「SBNR: 教会につながらないアメリカを理解する」	Robert C. Fuller (宗教学者)	・宗教組織に無関与の米国人は40%弱へと増加。しかし米国人は歴史的にスピリチュアルな生活をしてきたと主張。
C	<i>My Spirit Is Not Religious: A Guide To Living Your Authentic Life (A SBNR or Spiritual But Not Religious Book)</i> (2013)。「私の心は宗教的でない：あなたが確かな人生を送るためのガイドブック」	Tina Sacchi (スピリチュアル・カウンセラー)	・スピリチュアリティを基礎として幸せな人生を送る方法を叙述。
D	<i>Belief without Borders: Inside the Minds of the Spiritual but not Religious</i> (2014)。「境界なき信仰：SBNR の心の中」	Linda A. Mercadante (歴史神学者)	・実証研究（約100人に対するインタビュー）の結果を分析。
E	<i>When "Spiritual but Not Religious" Is Not Enough: Seeing God in Surprising Places, Even the Church</i> (2014)。「SBNR が十分でない時：教会のほか予想外のところで神を見る」	Lillian Daniel (上級牧師、大学講師)	・神を見ることができるのは、教会はもとより心構えによって多くの場所で可能と主張。
F	<i>Spiritual But Not Religious: 108 Pearls of Eastern Wisdom</i> (2014)。「SBNR：東洋における108の珠玉の知恵」	Victor Parachin (任命宗教師、ジャーナリスト)	・スピリチュアリティは、西洋に限らず東洋思想にも数多いことを具体的に記述。
G	<i>Relig-ish: Soulful Living in a Spiritual-But-Not-Religious World</i> (2016)。「宗教心：SBNR という世界において魂を基に生きる」	Rachelle Mee-Chapman (元牧師、スピリチュアル・カウンセラー)	・特定の宗教に依存しなくとも、確固とした信仰と価値観を持って生きることができることを主張。
H	<i>Spiritual but Not Religious: The Search for Meaning in a Material World</i> (2019)。「SBNR: 物質的世界における意味の探求」	John Bartunek (カトリック神学者)	・生きる意味をスピリチュアリティという視点から探求。
I	<i>How to Meditate: Spiritual But Not Religious: Meditation Techniques for Beginners Gurus and People Who Get Stuck</i> (Kindle)。「SBNR 方式の瞑想法入門」	Francis Taylor (出版社)	・容易にかつ楽しく取り組める瞑想法を提示、これにより自分と人生を発見できると主張。

(注) Amazon (英語版)において書籍名に“Spiritual but not religious”を含む書籍検索を筆者が行い(2020年6月11日)、一定の評価を得ている書籍の中から整理して作成(掲載は刊行年の順)。

な動機を持つ人々によって構成されている側面があろう。

一方、そこに共通しているのは、マインドフルネス (mindfulness)<sup>7</sup>や超越瞑想 (Transcendental Meditation)<sup>8</sup>、聖典の熟考、倫理の向上<sup>9</sup>などにみられるように瞑想という行為が中心になっているものが多いが<sup>10</sup>、さらに宗教の領域以外でも自己啓発セミナーや各種セルフヘルプセミナー・グループといった多様な動きもみられる (島菌 2012a : 153)。

以上、SBNR という動向を概観したが、そこでは「スピリチュアル」と「宗教」という二つの類似した用語が一つの表現の中で使われているので、SBNR を直ちに的確に理解するのが必ずしも容易でない (あるいは人によって理解の仕方が相当異なる可能性がある)。そこで次に、スピリチュアリティと宗教それぞれのエッセンスないし構成要素を考察し、それを踏まえて SBNR を理解することにしよう。なお、以下の議論の概要は**図表 2**として整理した。

## 2. スピリチュアリティ、宗教、そして SBNR

スピリチュアル (あるいはスピリチュアリティ) とは何か、またそれと密接に関係する宗教とは何か。そして両者はどのような関係にあるのか。これらについては、それぞれ多種多様な見解がある。このため、例えば「現在、世界の学界で広く受け入れられている宗教の定義は存在しない」 (島菌 2012a : 95) というのが実情である。こうした状況のもとで筆者がこれらの問いに回答することは不可能である。ただ、SBNR という課題を論じる以上、何らかの整理をしておくことが欠かせない。そこで本章では、スピリチュアリティと宗教につき、各種文献をもとに筆者なりの整理をし、それを踏まえて SBNR という現象を理解することとしたい。

---

<sup>7</sup> 直接的には「心が充満した状態」を指すが、それは今という瞬間に生じつつある思いを、何の評価をすることなく受け止める (とらわれのない状態でただ観る) という心理学的過程ないしその実践 (自己鍛錬法) を意味する。ストレス逓減、うつ病緩和、冷静な意思決定などを可能にするとされる (Wikipedia “Mindfulness”)。

<sup>8</sup> 1950 年代に知られるようになった、ヒンドゥー教に由来するマントラ瞑想法。非宗教的な側面と宗教的な側面がある。

<sup>9</sup> Wikipedia “Mindfulness”。

<sup>10</sup> 脚注 2 を参照。



図表2 スピリチュアリティ（ないし SBNR）について

	スピリチュアリティ
■概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宗教は個人の霊的な成長や人智を超えたものとの一体化に重点を置くのに対して、スピリチュアリティは、むしろ個人が生きるための深い動機（心・身体・精神のあり方）の追求を重視。</li> <li>・宗教は伝統的に組織ないし共同体による取り組みを重視するのに対して、スピリチュアリティは、組織による対応よりもむしろ個人による取り組みが中心。</li> </ul>
■背景と特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・20世紀最後の四半世紀以降顕著になった新自由主義、個人主義の風潮を反映して台頭。</li> <li>・従来の宗教哲学に加え、心理学や人文学など現代的な知識や智慧、さらには一部東洋的思想も取り込んだ人間理解を提示。グローバルで多元的・多中心的な性格を持つ。神という発想よりも、人間を超えた高次の力（higher power）という考え方に親和性。</li> <li>・医師・看護師・心理療法士・カウンセラーなど人間（ヒューマン・ケア）に直接関わる専門職の間でとりわけ普及。</li> </ul>
■評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見えない宗教（invisible religion, implicit religion）と称されることもある。一方、その具体的な動向としてニューエイジ運動、マインドフルネス、瞑想などが含まれるので、宗教というよりも「自己変容を主題とする新しい文化現象」と理解される場合もある。</li> <li>・宗教という概念は、もともとキリスト教など西洋的宗教を念頭に置いたものであり、SBNRはその流れの一環（逆に言えばスピリチュアリティはむしろ東洋思想に親和的）とする見解もある。ちなみに、非西洋では「イスラームは宗教か社会制度か、儒教は宗教か道徳か」などといった根本的な問いがある。</li> <li>・SBNR に対しては、宗教団体からの批判（宗教心の乏しさ、共同体の軽視、厳格さや深遠さの欠如など）が聞かれるほか、日本やアジアでみられた伝統的な社会の連帯感、道徳観念、謙虚さなどの要素が希薄であることも特徴。</li> <li>・一方 SBNR は今後、宗教の再編、多様化、革新、あるいは 21 世紀型宗教の創造につながる可能性も秘めている。</li> </ul>
■その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語では「スピリチュアル」のほか、「精神性」や「霊性」などとも表現される（但しこれら相互のニュアンスにはかなりの差異がある）。</li> </ul>

（注）伊藤（2003）、島藪（2012a、2012b）、星野ほか（2010）、Mercandante（2014）、Wikipedia（Spirituality）、Wikipedia（スピリチュアリティ）、Wikipedia（Spiritual but not religious）をもとに筆者作成。



## (1)スピリチュアリティと宗教

スピリチュアリティという用語を考える場合、まず指摘する必要があるのは、歴史的にみた場合、宗教的 (religious) とスピリチュアル (spiritual) は、宗教という概念の全ての側面を表わすうえで長らく同義語として使われてきたことである (Wikipedia “Spirituality”)。つまり、この二つの言葉は、歴史上それほど明確に区別されることなく比較的長期間使われてきた (伊藤 2003 : 153) という経緯がある。

しかし、20世紀最後の四半世紀になって、宗教とは独立したものとしてスピリチュアリティを捉える考え方がアメリカや日本で広がってきた (島菌 2012b : 5)。そして1990年代以降は、英語圏においても日本においても、両者は区別して用いられる場合が多くなっている (Wikipedia “Spirituality”、Wikipedia “スピリチュアリティ”)。つまり、スピリチュアリティという古い言葉が新しい意味で使われるようになってきている (Mercandante 2014 : 4)。確かに、スピリチュアリティと宗教は、内容面で基本的に重複する部分 (例えば、より大きな現実ないし力と繋がりたいという欲望) も多いが、現実には両者を概念的に区別するのが現在の一般的な用語法になっている (同 : 5-6)。

では、両方の用語において、どのような要素が重複し、どのような要素が重複しない独自のものか。それとも、時折指摘されるように (星野ほか 2010 : 594)、両者の間で重複する要素は無い (スピリチュアリティは宗教や信仰の世界と切り離されて議論され二分法として議論されている) とみるべきなのか。これらについては多様な側面から議論されている (後述する) が、現在使われるこの二つの用語には、明らかにニュアンスを異にするひとつの側面がある。まずそれをみよう。

## (2)現代の用語法としてのスピリチュアリティ : 宗教との差異

現代の用語法では、「スピリチュアリティ」(カタカナ書きの日本語、あるいは英語の spirituality) は、個人の精神的な生き方 (心・身体・精神の良いあり方) に関連付けて用いられる場合が多い一方、「宗教」は組織的ないし共同体的な次元を表現する場合が多く、その点で両者は使い分けられている (Wikipedia “Spirituality”)。まず、ここに大きな差異がある。

つまり、スピリチュアリティは「宗教教団や伝統に拘束されない個人的・非制度的

な宗教意識」(星野ほか 2010: 594-595)、あるいは「個人の内面の奥深くにある宗教的な感情と信念に関連するもの」(Wikipedia “スピリチュアリティ”)であり、「人間の統御できるものを超えた、聖なるものに関わるような、人間の経験や資質や特性を指す」(島藺 2012b: 5)。つまり「宗教とスピリチュアリティは[人間の精神面を表す点では]密接に関わりあっているが、同じことがらをシステム<sup>11</sup>に力点をおいて言うか、個人に力点を置いて言うか」(同)の差異である、という見方も可能である。

### (3) スピリチュアリティを特徴づけるもの

上記を簡単にまとめるならば、スピリチュアリティと宗教という二つの言葉の基本的な差異は、個人の精神的な生き方に重点を置いてみるか、それともそのための組織ないし共同体(宗教教団)に重点を置いて捉えるか、にある。ただし、両者の間には、単にこうした差異があるにとどまらず、次の諸点によっても特徴付けられている。

第一に、現代のスピリチュアリティは、人が現実生きる上で最も基本的な価値と意味に焦点を合わせており、このため宗教を特徴付けるその他の側面(超自然的な現実や神の存在)をすべて含むとは限らない一方、倫理について人間的な面(愛、共感、忍耐、寛容、許し、満足、責任、調和、他人への関心)も強調される場合が少なくないことである(Wikipedia “Spirituality”)<sup>12</sup>。

この点で、現代のスピリチュアリティは、それを宗教と見なすかどうかは別として、純粹の物的世界観を超えた幅広い精神的なものとして位置づけることができる。また、その実践(瞑想やその類似行為)によって心の平安がもたらされるので、スピリチュアリティは幸福の基礎条件を整えるものといった理論もある。その結果、健康面で好ましい影響をもたらすことが主眼とされている場合(心の治療的目標への重点シフト)<sup>13</sup>もある(Mercandante 2014: 230)。

---

<sup>11</sup> 伝統的な宗教の場合、一方で体系化された言説を維持する聖職者や知識人の集団があり、他方では一般信徒の共同体があることによって「システム」が構成され支えられてきた(島藺 2012a: 25)。

<sup>12</sup> ただ、これらの側面は、その重要性を認めるとしてもスピリチュアリティとしてそこまで含めるべきではないという見解(バートランド・ラッセル、ジャン・ポール・サルトル等)もある(Wikipedia “Spirituality”)。

<sup>13</sup> それをグループで実施している一例として、アルコールクス・アノニマス(Alcoholics Anonymous、略称 AA。禁酒の会)という良く知られた団体がある。これは、アルコール依存症から脱却しようとする相互援助(自助グループ)の集団であり、世界中で約 200 万人が所属している

第二に、現代のスピリチュアリティは、人の心のあり方を重視するので、宗教を個人心理の側面から捉え直す（島菌 2012b : 5）など、心理学や人文系の学問領域における成果（ポジティブ心理学<sup>14</sup>、自己実現論<sup>15</sup>など）を援用している場合も少なくないことである（Mercandante 2014 : 231）。それによって教義の合理化、単純化、均質化、あるいは修正がなされ、従来の宗教的教義に代わる新しい教義が導入されている場合が多い（同）。

一方、科学と宗教は、長年にわたり対立するものと受け取られてきた。しかし、科学者の中には、科学とスピリチュアリティは、対立するものとみるよりも相互補完的とみる考え方が一部ながらあり、スピリチュアリティにおいてはそれが活かされている面もある<sup>16</sup>。さらに、非西欧（とくにアジア）宗教からいくつかの概念（転生輪廻の思想<sup>17</sup>など）を借用している場合もある。これらのことは、スピリチュアリティの内容の普遍性を高める一つの要因になっている（Mercandante 2014 : 231）。

第三に、スピリチュアリティは、終末医療を含む医療や看護など医療関係者をはじめ、心理療法士、福祉介護士などヒューマン・ケアに関わる専門職によって重要な概念として提唱されていることである。この点は宗教の場合とかなり異なる。とくに日本では、オウム真理教事件以降、宗教のイメージ低下が影響したこともあり、意識的に宗教と距離を置く意味もあってスピリチュアリティの概念がこうした専門職領域において積極的に提唱される面がある（Wikipedia “スピリチュアリティ”）。

第四に、以上でスピリチュアリティと表現したことは、特定の集団ないし思想を意味するものではなく、多様なそして幅広い側面を含んでいることである。医療、介護、

---

（[https://en.wikipedia.org/wiki/Alcoholics\\_Anonymous](https://en.wikipedia.org/wiki/Alcoholics_Anonymous)）。そこでは、通常 higher power（人間を超えた大きな力）という表現が用いられ、神という表現は使われない。

<sup>14</sup> ポジティブ心理学の概要は、Peterson (2013)、岡部 (2017 : 233) を参照。

<sup>15</sup> アメリカの心理学者マズローが提唱した「人間の欲求5段階説」(Maslow 1943) を踏まえた考え方。人間の欲求の最終段階は「自己実現の欲求」であるとされる。詳細は、Wikipedia “Self-actualization”、岡部 (2017 : 233) を参照。

<sup>16</sup> 現在、科学として知られるものは従来自然哲学 (natural philosophy) として探求されており、“science” という表現は19世紀に登場した。このため「宗教と科学」という表現も、19世紀に登場した比較的新しい視点である。これには4つの視点 (類型学) がある。すなわち (1) 二つは対立関係 (incompatibility)、(2) 二つは相互に独立 (independence)、(3) 二つは対話可能 (dialogue)、(4) 二つは統合可能な一つの領域 (integration) (Wikipedia “Relationship between religion and science”) がそれである。新しいスピリチュアリティには (4) の視点とその成果 (社会科学) が一部含まれると理解できよう。

<sup>17</sup> 死んであの世に還った魂が、この世に何度も生まれ変わってくるとするヒンドゥー教や仏教など東洋の思想。

福祉、セラピーの専門家の中でスピリチュアリティの必要性が強く認識されるようになってきていることは上述したが、そのほか教育、芸術などでも新しいスピリチュアリティへの関心が顕著に広がっている（島菌 2012a : 35、45）。さらにスピリチュアリティと健康ないし幸福についての科学的研究もなされており、現代の多くの（北米での）研究は、スピリチュアリティと精神的に良い状態（well-being、幸福）は正の関係にあるとされている。その関係は、健康な人についてだけでなく、身体的な病気あるいは心理的な障害がある人を広く含めてみられるとされている（Wikipedia “Spirituality”）。さらに、スピリチュアリティへの要素を濃厚に含んだセルフヘルプ運動<sup>18</sup>も拡充されている（島菌 2012a : 40）。

第五に、こうした実体を捉え、スピリチュアリティは宗教とは異なる面の多さに着目する見解も多いことである。例えば島菌（2012a : 20）は、上記のような多様な現象を一括して新霊性運動（new spirituality movements）、新霊性文化（new spirituality culture）、あるいは単に「新しいスピリチュアリティ」（new spirituality）と規定している。そして、その特徴は（1）個々人の魂や心や意識や身体に体験される変化が重視される、（2）集団での実践よりは個々人の実践に力点が置かれる、（3）個人主義的である、（4）グローバルで多元的・多中心的である<sup>19</sup>、などにあると指摘し（同 23-25）、新しいスピリチュアリティは、伝統的宗教というよりもむしろ「自己変容を主題とする文化である」（同 23）と位置づけている。

#### （4）宗教的ではないがスピリチュアル（SBNR）

以上、スピリチュアルとされるものは、宗教に関連する面もあるものの、それとは相当異なる面が多いことを指摘した<sup>20</sup>。

#### スピリチュアリティの特徴

すなわち、スピリチュアリティは（1）宗教と同様、個々人の内面の奥深くにある感

---

<sup>18</sup> 前出のアルコールクス・アノニマス（AA）の運動はその一例である。脚注 13 を参照。

<sup>19</sup> 個々人はグローバルな広がりを持つさまざまな情報や文化資源と多面的につながっていること、その結果、スピリチュアリティは一つの言説や教義の体系・儀礼・共同体などと排他的に関係を取り結んでいるのではないこと（島菌 2012a : 25）を指す。

<sup>20</sup> Spirituality という言葉が各種領域（ヘルスケア他）においてどう定義されているかに関する研究（McCarroll et al. 2005 : 43-59）によれば、研究対象とした 27 種類の定義には共通点がほとんどないと報告されている。

情と信念に関わる（精神性ないし霊性）、しかし(2)集団としての活動よりも個々人の実践に重点が置かれる（集団主義というより個人主義）、(3)心理学などの学問的成果も取り込まれている（教義の合理性や普遍性）、(4)医療・看護・セラピー・介護などヒューマン・ケアの領域、さらには教育、芸術、セルフヘルプなど人間の感情や心理に関わる各種専門的領域に広がりを見せている（専門領域への浸透）、(5)グローバルな情報や文化資源と多面的につながっており、一つの言説や教義の体系・儀礼・共同体などと排他的な関係を取り結んではいない（グローバル性・多元性・多中心性）、(6)したがってこれは「自己変容を主題とする文化である」という見方もされている（新しい位置づけの可能性）、などである。

## 宗教

以上のように整理すると、スピリチュアルは、多くの面で伝統的な宗教とは相当趣が異なる面を持つことが理解できる。そこで次に、もともと宗教といわれることが何なのかを簡単に見ることとし、それらいずれの定義に照らしてもスピリチュアリティは相当性格を異にする面が大きいことを明らかにしよう。

宗教については、前述したとおり。現在、世界の学界で広く受け入れられている定義は存在せず（島菌 2012a : 95）、実に多様な定義がある。ここでは、それらの幾つかを例示しよう。例えば『宗教学事典』（星野ほか 2010 : 2-3）では二種類の定義が提示されている。一つは、宗教とは「例えば聖と俗という二分法に立ち、人々をその信念で結びつけるものという統合機能を強調する機能論的定義」がまずあり、もう一つとしては「宗教とは、無限なるものを認知する心の能力、絶対帰依の感情、聖なるものの顕現などそれ自体独自の領域であり他の何ものにも還元できないとする本質論的定義」があるとしている。これらはいずれも相当抽象的な定義といってよかろう。

もう一つ別の定義を挙げておこう。それは SBNR に関する現代の代表的研究書といってよい Mercandante (2014) によるものである。そこでは、宗教とは「神話、象徴、儀式、概念が一体となることによって構成される複雑で適応性のあるネットワーク (a complex adaptive network) であり、それらが一体となって人間の感情、思考、行為を創り出すもの」（同 5 ページ）とされている。ここでは、宗教の機能が規定されるとともに、そうした機能を果たすうえでは、組織的ないし集団的な要素も欠かせない面があることが示唆されている。つまり宗教とは社会的構築物 (social construct)

であるとみなされている。経済学の用語を用いるならば、それは一つの社会関係資本として社会を支える機能を果たすものといつてよい<sup>21</sup>。

## 宗教とスピリチュアリティ

以上で概観したように、スピリチュアルと宗教は、重なる部分が当然あるものの、全体としてみると、それぞれかなり異質の要素を含む。このため、現代では「宗教には関心がないが、スピリチュアリティには関心がある」というような人が増えてきているのはいわば自然の流れである（島藺 2012a : 7）。その典型として、近年の欧米では Spiritual but not religious (SBNR)（霊性は信じるが宗教は信じない、スピリチュアルだが宗教的ではない）とする人々も増加している（Wikipedia “Spirituality” ; Wikipedia “スピリチュアリティ”）。そして「当事者がこの文化は『宗教ではない』というのに一定の妥当性がある」（島藺 2012a : 25）という判断も可能である。

### (5) SBNR の評価

以上、伝統的な宗教には見られない SBNR の様々な側面と特徴を概観したが、そうした社会現象をどう評価すればよいのだろうか。

第一に明らかなのは、前述したとおりそれは宗教制度の束縛から開放され、個人の感情や経験についての自由が拡大したことを意味する。これは（とくに米国社会では）歓迎されることといえよう（島藺 2012a : 77-78）。

では、伝統的な宗教という場合、どういう意味で自らの立場が堅固な体系性・組織性を持つものによって従来拘束されていたと考えられていたのか。これには多様な面がある。例えば(1)集団への帰属を求め、集団の規範や権威体系に服することを求めること、(2)唯一の至高の人間（キリストやブッダなど）あるいは神的超人的な存在への帰依を求めること、(3)自己が属する宗教のみが正しく他の宗教や思想的立場は無価値であるかごくわずかな価値を持つに過ぎないとする独善的・排他的な姿勢、(4)神などの超越的存在による死後の報いを説き、信じない者が罰せられるとする二分法、などが指摘できよう（島藺 2012a : 99-100）。新しいスピリチュアリティは、確かにこれらの制約から人を自由にする面がある。

---

<sup>21</sup> 社会関係資本 (social capital) については、岡部 (2017 : 322-328) を参照。

第二に、上記のような進歩的側面には行き過ぎに伴うマイナス面がある点にも注意が必要なことである。新しいスピリチュアリティ思想における「自己」への過剰な関心や、運動形態における強度の個人主義は、見方によっては新自由主義（ネオ・リベラリズム）の負の側面を伴わざるをえない（島菌 2012a : 77-78）。そこではスピリチュアリティは私事となり、関心は自己自身へと狭まって社会への関心は希薄化する。そして、かつて宗教が持っていた倫理的な規範は捨象し、専ら個人主義的な側面や享受的な側面のみが取り入れられることになる。そしてかつての宗教が持っていた社会正義への関心や、横の連帯を基盤とした共同体的側面が抜け落ちてゆく（同 77-78）。新しいスピリチュアリティに対するこのような巨視的な批判がどれほどの妥当性を持つかの評価は難しいが、こうした批判があてはまる部分が少なからず含まれていることは認めないわけにはいかない（同 77-78）。そして、これは次のこととも関連している。

第三に、宗教という語もスピリチュアリティという語も、ともにキリスト教文明の中で用いられてきたものであり、キリスト教と結びついた意味をたっぷり含んでしまっている点に留意する必要があることである（島菌 2012a : 94）。その点を無視して日本（やアジア）の精神、ないしより良い社会のあり方を理解すれば妥当性を欠くことになりかねない。

まず「宗教」という語は、19世紀以来、キリスト教を離れて世界各地の現象を指すのに用いられるようになった。しかし、その際、適用が容易でない事柄にであうことが少なくなかった。例えば（1）「イスラームやユダヤ教は宗教なのか社会制度なのか」とか、（2）「儒教は宗教か、道徳なのか」といった問題があり、また（3）日本でもインドでも神道やヒンドゥー教を宗教と呼ぶことに根強い抵抗がある、などである（同 95）。

西洋の概念として形成された「宗教」を世界の諸現象にあてはめて安心して用いられる段階に、人類社会は今なお到達していない（同 95）。前述したとおり<sup>22</sup>、西洋の新しいスピリチュアリティは、アジア宗教の影響を強く受けているがアジア宗教が元来もっていた共同体的な側面、倫理的な側面は捨象して、もっぱら個人主義的な側面、享受的な側面のみを強調して取り入れたにすぎない面がある。こうして新しいスピリ

---

<sup>22</sup> 転生輪廻の思想のほか、共同体の思想、家族倫理、儒教倫理など。



チュアリティにおいては、かつての宗教がもっていた社会正義への関心や、横の連帯を基盤とした共同体的側面が抜け落ちてゆく（同 77-78）。

日本における新しいスピリチュアリティを考える場合、米国でみられる単純な個人主義的（あるいは市場主義的）な要素だけでなく、これまでの日本（およびアジア）でみられた伝統的な連帯感、道徳観念、謙虚さや、それを活かした社会のあり方を考慮してスピリチュアリティを確立してゆくことが不可欠であることを筆者は強調しておきたい<sup>23</sup>。

最後に一つ、英語の“spirituality”に対する日本語について付言しておこう。スピリチュアリティは、宗教を人間の側の特性や経験に即してとらえようとする言葉であり、人間の統御できるものを越えた、聖なるものに関わるような、人間の経験や資質や特性を指すものを意味するものである。そして、その語は中世に遡る「靈性」にもっとも近い意味を持つ（島菌 2012a : 96）。このため日本語としては「靈性」や「精神性」が充てられる場合もある（星野ほか 2010:594-595、島菌 2012b:5、Wikipedia “スピリチュアリティ”）。

しかし“spirituality”には、上記のとおり組織的な伝統宗教から離れて靈性に目覚めるような新しい宗教現象を意味するとともに、そうした「文化運動」自体を指す場合も多い。このため 1990 年以降、日本では「スピリチュアリティ」とカタカナ標記される傾向が強い（Wikipedia “スピリチュアリティ”）。そして、その具体的な現象として「新しいスピリチュアリティ」と呼べる新たな運動や文化形態（神靈性運動・新靈性文化）があり、アメリカではニューエイジ・スピリチュアリティ、日本では精神世界、グリーンワークの集い、セルフヘルプ・グループなどの運動がある（島菌 2012a : 96-97）。

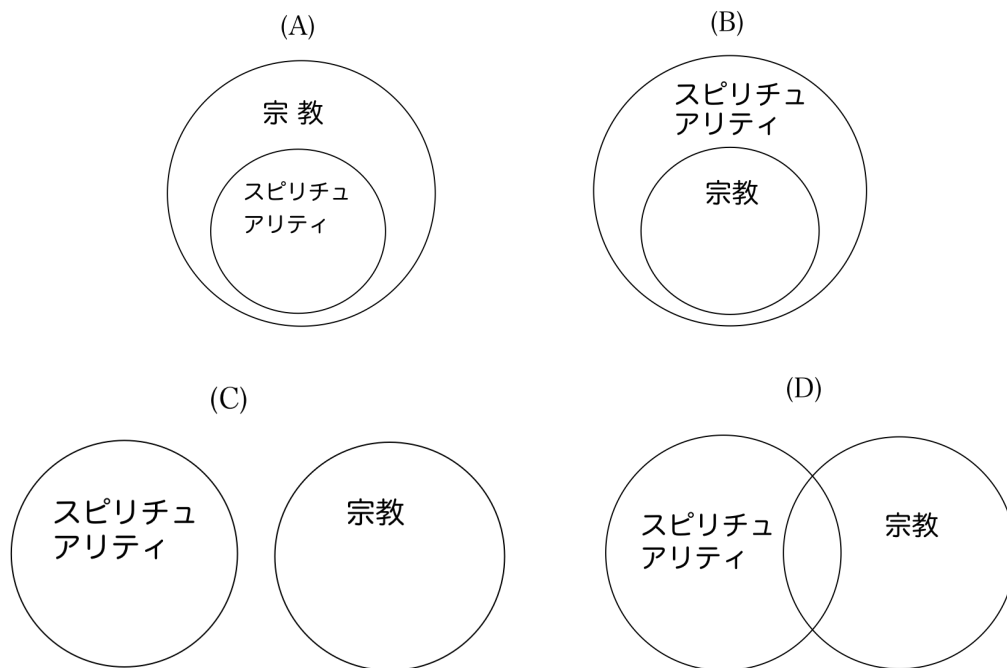
## **(6) スピリチュアリティと宗教：一つの図式的整理**

以上述べたスピリチュアリティと宗教の関係を理解するため、ここで一つの単純な図を導入して整理してみよう。むろん、両者の関係は時期によって変化しており、それぞれが含む要素が拡大したり、あるいは変質したりする。また両者は平面的な関係

---

<sup>23</sup> この視点が必要なのは、望ましい人間社会を理解するためには社会をどのようなで基本的枠組みによって理解するか（2 部門モデルではなく 3 部門モデルで理解する必要性）に直接関係するからである。この面に関する理論的な議論は、岡部（2012、2017、2018、2019）を参照。

図表3 宗教とスピリチュアリティの関係（平面的な概念図）



(注) 本文で言及した諸文献をもとにして筆者作成。

でなく色々な要素が重層的に関わっている面も多い。しかし、それらの面を捨象し、あえて単純かつ平面的な概念図として示すことによって、上記の議論をある程度理解を深めうる面もあると思われるからである。

図表3は、スピリチュアリティと宗教がどのような関係にありうるかにつき、4つの代表的な場合を平面的に示したものである。(A)では宗教がより大きな概念でありスピリチュアリティはその中に含まれること、(B)では逆にスピリチュアリティの方がより大きな概念であり宗教はその中に含まれること、を示す。一方(C)は宗教とスピリチュアリティは格別密接な関係を持たないという理解を示しており、(D)ではその両者は部分的に重複ないし関連を持つことを示している。

このような図式区分をすると、上述した各種の議論は一見この4つのいずれかに分類できそうな気がする。しかし、そのような単純かつ平板的な理解に当て嵌められないところに問題の複雑さ、あるいは本質があることがわかる。事実、同一論者でも文脈次第で複数の図によって理解している場合が少なくない。

#### 図(A)、図(B)による理解

まず (A) と (B) ではどちらの妥当性が高いのか。これは、既に述べたとおり、歴史的には宗教とスピリチュアリティは長年同様の意味で用いられてきた (Mercandante 2014 : 5-6 ; 伊藤 2003 : 153 ; Wikipedia “Spirituality” )。このため両者を区分する意味は乏しく、あえていえば (A) と (B) の二つの円は同一半径で完全に重複する一つの円と理解されてきた、といえよう。

では、現代ではどうか。スピリチュアリティは宗教を含んだより大きな概念だとする見解 (B) はあまり見られない。逆に、スピリチュアリティは、前述したとおり、広く捉えた宗教の一部を構成しているとする見方 (A) が一般的である。

スピリチュアリティを新しい文化とみなす当事者は、スピリチュアリティは「宗教ではない」というのに一定の妥当性があるが、もちろん宗教の定義を広げれば、この現象を宗教と呼ぶことができる (島菌 2012a : 26) 。だから、新しいスピリチュアリティも、広い意味では宗教の内部に含まれる (島菌 2012b : 8, 11。図 (A) が妥当) とするのが一般的な理解である。また、スピリチュアリティは、専ら自分を対象とするものである。これに対して「宗教は単に自分を対象とするだけではなく、相互に関連する結末、価値、目標が入り組んだものであり、人間社会 (コミュニティ) 、より広い世界、そして死後のことも扱うものであるというのがより一般的な理解である。このため、スピリチュアリティは宗教よりも範疇が狭いものとどまる」 (Mercandante 2014 : 238) と位置づける (図 (A) ) のがより妥当であろう。

### 図 (C) による理解

次に、スピリチュアリティには前述したように多様な側面が付加され発展してきているので、図 (C) のように宗教とは別物になっていると理解すべきなのか。実は、こうした見方は現実には少なくない。既にのべたように「今日は鈴木大拙<sup>24</sup>の時代とは異なりなり、スピリチュアリティは、宗教や信仰の世界と切り離されて議論されている」として二分論を取る見方 (星野ほか 2010 : 594) もある。また、新霊性運動は一つの文化と捉える (同 : 598) 、あるいは前述したように「20世紀最後の四半世紀になって、宗教とは独立したものとしてスピリチュアリティを捉える考え方が広がってきた」 (島菌 2012b : 5) 、「新しいスピリチュアリティにおいては、宗教と独立に

---

<sup>24</sup> 禅についての著作を英語で著し、日本の禅文化を海外に広く知らしめた仏教学者 (1870- 1966)。

スピリチュアリティがあり、それこそ近代人にふさわしいものだと考えられることが多い」（島藺 2012a : 97）などという理解は、(C)図に近い。さらに「自己啓発セミナーや各種のセルフヘルプ・グループなどいわゆる宗教の領域外で人々がスピリチュアリティを見出す場が提供されるようになってきた」（伊藤 2003:153）という観察も、両者を(C)図のように捉えているといえよう。

なお、スピリチュアリティは、個的な超越感や超感覚性、あるいは人生の意味といった個人的な現象を対象にしているのが特徴であるため、見えない宗教 (invisible religion) とか、暗黙の宗教 (implicit religion) などと呼ばれることもある（伊藤 2003:154）。そして、SBNR (宗教的ではないがスピリチュアル) と自称する人々は、従来の宗教とは異なるスピリチュアル経路を歩みたいという意志表示をしているので、彼らもまた(C)図の見解に立っていると考えるのが自然である。

#### 図(D)による理解

以上で提示した図(A)～図(C)では、宗教とスピリチュアリティの差異をそれぞれ強調する視点から平面的に識別して論じた。しかし、宗教とスピリチュアリティの間には、濃淡の差はあっても何らかの関連があることはいずれのケースでも否定し得ない事実である。

この点を考えると、宗教とスピリチュアリティは、やや平板になるが結局図(D)のように、相互に関連する部分を持つ概念として理解するのが妥当ではなかろうか。「宗教とスピリチュアリティの関係は単純ではないが、宗教とスピリチュアリティが別々のものであるわけではない」（島藺 2012a : 99）。そして両者の間には複雑な関係があるだけでなく、もちろん宗教の定義を広げれば両者の関係は異なるものとなりうる。したがって、本稿では両者の関係をやや単純に図(D)のように理解することにしておこう。

### 3. SBNR の評価と展望

以上見てきたスピリチュアリティ、あるいは SBNR というエートス（精神ないし風潮）は果たして現代社会にどのような意味を持ち、今後どのような展開をする可能性があるのだろうか。以下では、もっぱら Mercandante (2014) に依拠しつつこれらの点を考えてみたい。

## SBNR の評価

第一に、スピリチュアリティは、各種の制度的束縛を伴っていた伝統的宗教に対して自由主義（リベラリズム）の精神を吹きこみ、人々に精神的な自由、工夫、進歩をもたらした。その結果、宗教が後退した（神が死んだ）時代において社会に新しい創造的な方向を提供したことを評価できる（Mercandante 2014 : 235）。それは現に、多くの人にとって個人的に数多くの利益（内的平和、幸福、自己認識、ストレス緩和）をもたらしている（同）。

第二に、アメリカにおける伝統的な宗教（特にキリスト教）のあり方に幾つかの面で課題を提起し、その結果、宗教内部での対話促進、科学的知見や哲学的要素の取り入れ、自由度の高い活動の推進など、幾つかの進歩を実現したことである（同）。これらの点も積極的に評価できよう。

第三には、以上の点とは対照的に、幾つかの課題も指摘されている。例えば、SBNRは「共同体を軽視する消費文化、あるいは怠慢なライフスタイルの現れであり、厳格さや深遠さを欠き、浅くて思いつきのもの」とするなど、「宗教心の乏しさ」という批判が既存の宗教団体からなされていることも指摘する必要があるだろう（Wikipedia “Spiritual but not religious”）。

## 若干の展望

スピリチュアリティのこうした功罪を考えてゆくなれば、結局、個人や社会を確実に、そして恒久的に良い方向に変えてゆくうえでは何が必要か、という根本的な問題に突き当たる。そのためには、果たして単に個人的な研鑽、あるいは講演会やグループワークへの参加などで果たして十分なのか、それとも、それとも宗教的コミュニティの構築という労力を要する作業なくしては、永続的な成果は消え去ってしまう脆いものにとどまるのか、という難問に答える必要がある。

つまり「宗教とは何か、その構成要素は何か」という問題に行き着く。その場合「宗教は、単に自分を対象とするだけではなく、相互に関連する結末、価値、目標が入り組んだものであり、それは人間社会（コミュニティ）をはじめ、より広い世界、そして死後のことをも扱うもの」（Mercandante 2014 : 238）であることを認識すべきという大きな立場もある。このため、もしそうした前提で考えるならば、スピリチュアリティは明らかに限定的な可能性しか持たないともいえよう。

われわれがこの社会で生きていくために拠り所とする価値は、先立つ世代からの信仰面での伝統やコミュニティとして努力してきた結果に他ならない。スピリチュアリティも、こうした土壌のうえに花開かせる必要がある。さもなくば、スピリチュアリティは、切り花と同様、水が切れれば萎れてしまう (cut-flower culture にとどまる) 可能性もある (Mercandante 2014 : 239)。

ここで留意しておくべきことが一つある。それは、前述したアンケート調査 (Pew Research Center 2019) において「所属する宗教はない」と回答した人 (“nones”) が 2018-2019 年には 26% にまで上昇したが、彼らを宗教心がない人達だと判断するならば、彼らの実態を見誤ることである (同 234)。彼らは背教者 (apostates) ではなく、また彼らが無神論者 (atheists) と呼ぶこともできない。なぜなら、彼らは自分よりも大きな存在があることを肯定する者も多い (同 234)。前記アンケートへの回答は、単に通常の宗教集団への所属の有無に関するものに過ぎず、彼らの心のうちを表したものになっていないからである (同)。アンケートにおいて「所属する宗教はない」と回答した者は、既述のとおり (3 ページ第 2 段を参照) 多様な宗教心を持っている。そうした現実を軽視するならば、誤った判断を導くことになる。

このような事情を考慮するならば、アメリカにおけるスピリチュアリティの動きは、今後、宗教間の対話を促進する可能性が高い (同 247)。その結果、アメリカの宗教の性格を、主として 3 つの側面から変えてゆく可能性がある。すなわち (1) 各種宗教の相互間における好影響の拡大 (religious cross-fertilization)、(2) 人々が複数の宗教団体へ所属する傾向の促進 (multiple religious belonging)、(2) SBNR のエートスを反映した新宗教創造の可能性、などが予想される (同 244, 247)。こうなれば、スピリチュアリティ (SBNR) により、米国の全ての宗教が挑戦を受けるだけでなく利益を享受することも意味する。そして、歴史的にそうであったように、宗教の多様化、再編、革新、あるいは 21 世紀型宗教の台頭につながって行く可能性がある。

#### 4. 日本における含意

上記のような米国での “SBNR” という展開は、日本にとってどのような示唆を与えるだろうか。筆者は、日本における最近の宗教ないしスピリチュアリティの事情を網羅的に論じる見識も、資格もない。ただ、上記のスピリチュアリティの議論を踏まえ

ると、近刊の拙稿（岡部 2020a, 2020b）でやや詳細に取り上げた「実践哲学」（トータルライフ人間学ないし魂の学）に焦点を合わせ、それが“SBNR”という文脈の中でどう位置付けられるかについて、多少考察を加えることはできる。従って、以下ではそうした限定的な視点から幾つかの点を指摘したい。

### 「実践哲学」を評価する一つの視点

第一に、別途論じた「実践哲学」は、宗教と対比した場合にスピリチュアリティを特徴づける要素である現代性（個人主義、普遍性、科学性、実証性、公開性）を充足していることを指摘できる。

この実践哲学は、あくまで個人としての生き方の探求に重点が置かれる一方、学びの場としては公開講演会や書籍、各種セミナーへの参加など、個人の努力が先ず求められる。そして自己啓発においては、人類の叡智を結集した普遍性の高い哲学が現代的な心理学で補強された人間観を学び、そしてそれを実践するという鍛錬が基礎とされている。米国におけるスピリチュアリティには、上述したとおり既存の宗教にはない基本的な性格として成熟性（more mature）、現代性（contemporary）、あるいは倫理哲学の色彩（ethical philosophy）といった特徴があるが（Mercandante 2014:233）、これらはまさに「実践哲学」の特徴でもある。このための両者は軌を一にしており「実践哲学」には現代性があるといえる。

第二に、この実践哲学を推進する組織が「宗教法人」の形態をとっていることに積極的な意味があることである。それは二つの側面を指す。

まず新しいスピリチュアリティは、個人主義的な傾向をもっており、緩やかなネットワークを良しとして組織や集団行動は好まれないことが多い（島菌 2012a : 113）。そして指導者と長期的な関係を保ち、堅固な訓練を積んでいくということも好まれず、むしろメディアによる情報コミュニケーション（書物、ビデオ、インターネット）や、セミナー受講、講演会への参加などが大きな役割を演じ、場合によってはそれが商業的な形態で行われる場合もある（同）。しかし、そのような形態だけでは、持続的な共同体が形成されず、また対面的に密接な関係も醸成されない場合が多く、真摯な学びをしようとする人にとってはそれが弱点になる（島菌 2012a : 113-115）。こうした事態を回避し、身を入れて学ぼうとする人を支援するため、この実践哲学の推進組織は宗教法人という明確な組織形態をとっていると考えられる。



宗教法人の形態を採る意義のもう一つの側面は、より本質的なことであるが、この実践哲学はアジア宗教（仏教）の伝統を引き継ぐ<sup>25</sup>とともに、スピリチュアリティでは重視されていない悪や死というような人間の究極的限界を正面からきわめて重く受け止める思想も織り込まれており<sup>26</sup>、さらに人間のつながりや共同体の重視、個人の使命発動に伴う幸福と社会改革の可能性<sup>27</sup>など、東洋の伝統的な思想を継承している面も数多いことが特徴である。つまり、この実践哲学はこうした人間観と世界観を幅広くかつ体系的に提供しているので、その組織としてふさわしいのは、単なる業務運営組織ではなくやはり宗教法人と考えられる。

第三に、この実践哲学を推進する組織が宗教法人の形態を採っているものの、そこからイメージされる一般的な負の側面（堅固な階層組織、会員の自由度制約、会員にとっての各種義務の発生など）は見事な工夫によって回避されていることを指摘できる。例えば、組織体としては、一般にみられる厳格な階層構造とはかなり異なり、関係者の自発性が尊重されるセミラティス構造<sup>28</sup>が採用されている。また会員の研鑽に際しても、共通のライフスタイルを追求することに重点が置かれる一方、会員が学び研鑽する方法については自由度が高いこと<sup>29</sup>が大きな特徴である。

こうしたことから、この実践哲学は「宗教を超えた宗教、いわばスーパーレリジョン」（GLA 2016：18）と自ら表現していることには一理ある。そして、それは「敷居が低い現代的な宗教」（岡部 2020b：36-37）と性格づけることもできよう。ちなみに、社会の最前線で専門職として活躍する人々（経営者、教育者、政治家、芸術家、法務関係者、社会科学および自然科学の研究者など）が数多くこの実践哲学に共感して学ぼうとしているのは、この実践哲学が以上で概観したような現代人の要請（スピリチュアリティに共通する性格を帯びていること）に合致していることを示している。

## 現代の日本人に宗教心はあるか

以上では、スピリチュアリティの性格を色濃く持つ「実践哲学」ないし「敷居の低

---

<sup>25</sup> 例えば、仏教における「中道」が一つの中心概念となっている（岡部 2017：424-425）ほか、アジア的な転生輪廻の思想（円環的人生観）も取り入れられている（前出脚注 17、22、26 を参照）。

<sup>26</sup> 例えば、この実践哲学では「死んだら終わり」の人生観ではなく、人間はあの世とこの世を生き通す「円環的人生観」が提示されている（岡部 2020b：30）。

<sup>27</sup> その具体的事例は、岡部（2017：図表 13-8；2020b：図表 2）を参照。

<sup>28</sup> 岡部（2020b：脚注 33）を参照。

<sup>29</sup> 岡部（2020b：脚注 40）を参照。

い宗教」が持つ可能性を指摘した。しかし、現代の日本においてそれが広く受け入れられる素地が果たしてあるのだろうか。最後に、この点につき若干の考察を加えておきたい。

それを判断するうえでは「日本人の国民性調査」という継続的な意識調査（統計数理研究所が1953年以来5年毎に実施）があり、その結果が一つの示唆を与える。ここでは、その第12次調査（2008年）における宗教に関する質問項目の回答を分析した林（2010）の研究結果を概観することによって考察してみよう。

同調査では、多くの項目のうち宗教に関して長らく継続調査されてきた二つの基本的な質問項目があるので、先ずそれに着目しよう。その一つは「3.1 宗教を信じるか」（あなたは何か信仰とか信心をもっていますか？）である<sup>30</sup>。もう一つは「3.2 宗教心は大切か」（いままでの宗教にはかかわりなく「宗教的な心」というものを大切だと思いますか、思いませんか）である。林（2010）は、（1）この二つの回答が時代とともに日本でどう変化してきたか、そして（2）国際比較調査において日本はどのような特徴を持つか、という二つの視点から分析、その結果、この二つを組合せることによって日本における宗教の特徴が浮かび上がると指摘している。

まず、この調査結果とみると（**図表 4（1）**）、第一に、「宗教を信じている」とする回答（全年齢層の平均、構成比）がこの50年間およそ30%前後で推移してきたのに対して「宗教を信じていない」が各年70%前後となっている。つまり「宗教を信じる」者よりも「宗教を信じない」者が圧倒的に多いだけでなく、その比率がこの50年間明らかに安定している点が特徴といえる。この結果をもって日本人の大多数は従来から「不信心者」である、と簡単に特徴づけてよいのか。その間に答えるには次の点に関係してくる。

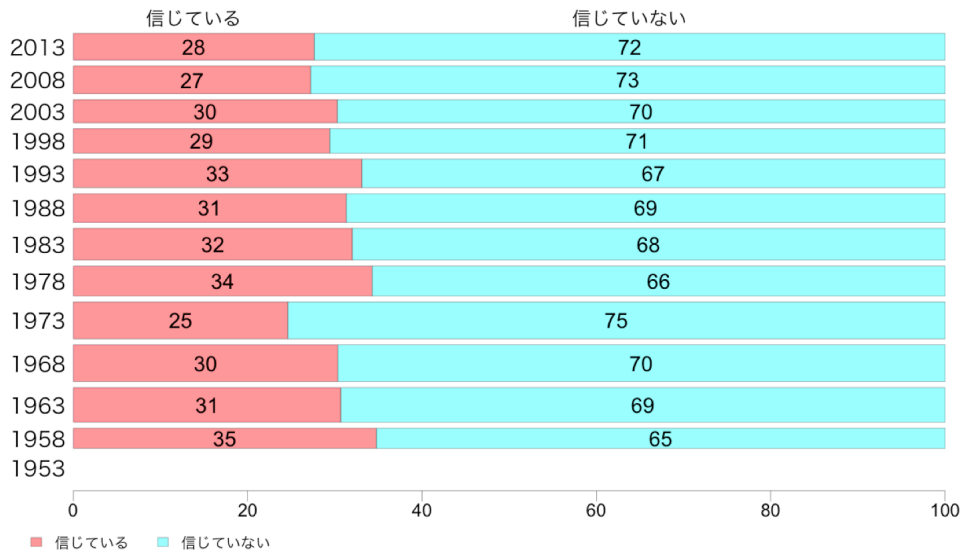
第二に、この調査における二つ目の質問である「宗教心は大切か」に対する回答（全年齢層平均、構成比%）をみると（**図表 4（2）**）、「宗教心は大切」とする人が、多少減少傾向にあるものの近年においても70%弱を占めていることがわかる。つまり日本では、信仰を持つ人の割合は低い（上記第一の点）、それに拘わらず「宗教的な心は大切だ」と思っている人の割合が高いこと（第二の点）が大きな特徴である。

---

<sup>30</sup> ここでは、宗教という言葉が既存の宗教宗派を示すものという印象を避けるため「信仰」という言葉が使用されている（林2010：40）。

図表4 日本人の国民性調査：宗教について

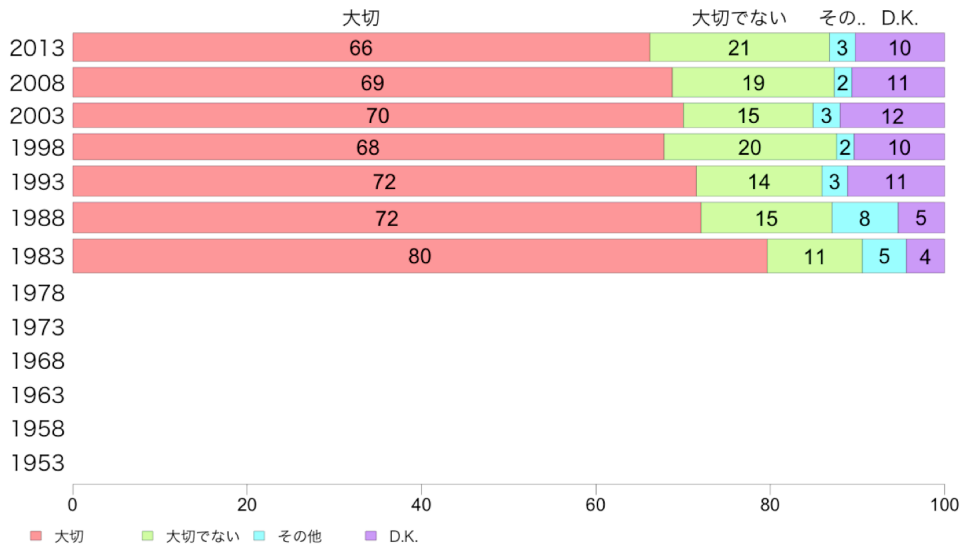
(1) 「宗教を信じるか」に対する回答（全年齢層の平均、構成比%）



(注) 問1 「宗教についておききたいのですが、たとえば、あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか？」に対する回答。

(資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」（第13次調査、2013年実施）。

(2) 「宗教心は大切か」に対する回答（全年齢層平均、構成比%）



(注) 問2 「それでは、いままでの宗教にはかかわりなく、「宗教的な心」というものを、大切だと思いますか、それと大切だとは思いませんか？」に対する回答。

(資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」（第13次調査、2013年実施）。

一見不整合とみえるこの二つの結果は、果たしてどう理解できるのか。これには幾つかの解釈が可能である。例えば(1)「信仰を持つ・持たない」の意味が西欧と日本では異なる意味で捉えられている可能性がある、(2)「宗教的な心」という考え方が日本独自のものとして理解されている(あるいは理解できる)可能性がある、などである(林 2010: 44-45)。このパズルを解くため、林(2010)は各国における同様のアンケート調査結果(図表5)を引用し、国際比較の視点を踏まえつつ一つの解釈を提示している。

図表5 各国アンケート調査にみる「信仰の有無」と「宗教的な心」(構成比%)

国名(調査年)	「信仰あり」	「信仰なし」	このうち: 「宗教心は大切である」とする比率
インド 2008	93	7	57
イタリア 1992	88	12	44
アメリカ 2006	79	20	34
シンガポール 2007	79	21	33
台湾 2006	65	34	58
英国 1987	65	35	30
フランス 1988	65	35	32
韓国 2006	54	46	58
香港 2006	38	62	53
日本 2008	27	73	60
上海(中国) 2006	28	73	22
北京(中国) 2006	14	86	35

(注) 1. 林(2010: 表2)より筆者が抜粋して作成。  
2. 四捨五入処理のため一部100%にならない部分がある。

図表5では、各国における「信仰あり」「信仰なし」それぞれの割合が示されているほか、「信仰なし」と回答した人のうち「宗教心は大切である」とする人の比率も記載されている(最右欄)。まず「信仰あり」の割合が高いのはインド、イタリア、アメリカ、シンガポールであり、いずれも7割以上を占める。次いで台湾、イギリス、

フランスが6割台、韓国が5割、香港が4割弱、そして日本が3割弱である。これに対し、中国本土の大都市（上海、北京）は1～2割台にとどまっている。これは同国において宗教を否定する政治的な指導が影響していると考えられる（林 2010 : 44）。

確かに、日本での「信仰あり」は上記のとおり国際的に見ても相当低位（27%）である一方、日本における「信仰なし」の多さ（73%）は、中国の大都市を除けば国際的にみて顕著に高い。ここで重要なのは、「信仰なし」と回答した人を対象として、「宗教的な心<sup>31</sup>が大切かどうか」をさらに質問し、その回答が各国で得られていることである（図表 5 の最右欄）。これをみると、日本では「信仰なし」と回答した人であっても、その60%が「宗教心は大切である」と答えている点がとりわけ注目される。なお日本以外では、その比率が5割強となっているのは、西欧ではなくいずれもアジアの国・地域（台湾、香港、韓国、インド）であり、これらの国・地域では日本と共通の特徴がみられる。

以上をまとめると（1）日本では西洋に比べて「信仰あり」とする人の割合は確かに低い（図表 4（1））、（2）しかし「信仰なし」とする人については実にその6割の人が「宗教的な心が大切」と考えている（図表 4（2）の最右欄）、したがって（3）日本におけるこうした傾向は西欧における「信仰あり」に質量ともに匹敵すること（信仰を持つという意味と似ていること）を表していると考えられる（林 2010 : 55）。

ただ、そのような理解に無理がある側面も確かにある。例えば、現代の20歳代、30歳代の日本人にとっては、信仰も宗教心も減少傾向が続いていることである（林 2010 : 表 1、図 2、図 3）。これは1990年代のオウム真理教に拠る事件を始め、カルト的宗教団体による事件が続いた状況を若い年齢で受けた世代として、宗教に対する拒否的な意識が残っているからである（林 2010 : 44）。また、現代の日本では、既存の宗教や宗教団体に対する信頼感は大変低い<sup>32</sup>うえ、「宗教的な心」ということばで共有できていたものにも頼ることができなくなっているのが現状である（同 : 55）。

こうした環境においては、既存の宗教、あるいはこれまで宗教的な心とされてきた

---

<sup>31</sup> 英語の質問表では“religious attitude”ないし“religious mind”という表現が用いられている（林 2010 : 45）。

<sup>32</sup> 例えば「東アジア価値観調査」の日本調査（2002年）の信頼観の質問では、「宗教団体」に対する信頼感をみると4選択肢の「あまり信頼しない+全く信頼しない」が80%にも達している（林 2010 : 55）。

ものとは多少異なるかたちの生き方(指針)が求められているのではないか。それは、社会・生活上のポジティブな考え方としての信仰あるいは宗教的な心(同:39)と理解することもできよう。現代性を持つスピリチュアリティが(日本においても)広がっているのは、こうした意味を持つ現象と理解することができる(同:55)。こうした日本社会の精神風土を考慮すると、今後「実践哲学」ないし「間口が広く敷居の低い宗教」は、時代の要請に応える条件を具備しており<sup>33</sup>、今後その同調者がさらに増える素地があるとみてよいのではなかろうか。

以上

### 【引用文献】

伊藤雅之(2003)『現代社会とスピリチュアリティ:現代人の宗教意識の社会学的探求』(愛知学院大学文学会叢書1) 溪水社。

ウィキペディア「スピリチュアリティ」、閲覧日2019年11月5日。  
<<https://ja.wikipedia.org/wiki/スピリチュアリティ>>

臼田寛・玉城英彦・河野公一(2000)「WHO憲章の健康定義が改正に至らなかった経緯」『日本公衆衛生雑誌』47巻12号、1013-1017ページ。  
<[https://www.jsph.jp/docs/magazine/2000/12/47\\_12\\_1013.pdf](https://www.jsph.jp/docs/magazine/2000/12/47_12_1013.pdf)>

岡部光明(2012)「経済学的世界観の強さと限界—経済学における人間の行動前提の再考そして対応方向—」、明治学院大学『国際学研究』41号、37-49ページ。  
<<http://hdl.handle.net/10723/1133>>

岡部光明(2017)『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして』日本評論社。

岡部光明(2018)「経済学の成熟をめざして:追加すべき三要素」学術研究ネット主催シンポジウム発表資料(2018年11月25日、於中央大学)、  
<<http://hdl.handle.net/10723/00003515>>

岡部光明(2019)「人間の社会的つながりと利他性:主流派経済学の盲点」、2020年日本経済学会春季大会発表論文・2020年総合人間学会発表論文。

岡部光明(2020a)「自己啓発は『より良い人生』をもたらすか:関連書籍の比較分析」、2021年総合人間学会発表予定論文、明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト(近刊)。

岡部光明(2020b)「『実践哲学』の展開」、明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト(近刊)。

---

<sup>33</sup> この実践哲学では、信仰を持つとは(1)人生を生きる指針を持つ、(2)人間観・世界観を持つ、(3)Something greatと共に生きる」という三つの段階ないし要素があるとされている(岡部2020b:36)。

島藺 進 (2012a) 『現代宗教とスピリチュアリティ』現代社会学ライブラリー 8、弘文堂。

島藺 進 (2012b) 「スピリチュアリティの興隆をどう捉えるか」、日本心理学会『心理学ワールド』59号、5-8 ページ。 <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11129161>>

統計数理研究所 (2013) 「日本人の国民性調査」 (第 13 次調査、2013 年実施)。  
<<https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/>>

棚次正和 (2016) 「宗教と霊性とスピリチュアリティ」、鎌田東二 (企画・編) 『スピリチュアリティと宗教』講座スピリチュアル学第 7 巻、序章、ビング・ネット・プレス。

林文 (2010) 「現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心—日本人の国民性調査と国際比較調査から—」、統計数理研究所『統計数理』第 58 巻第 1 号、39-59 ページ。

星野英紀・池上良正・氣多雅子・島藺進・鶴岡賀雄 (編) (2010) 『宗教学事典』丸善。

Bartunek, John (2019) *Spiritual but Not Religious: The Search for Meaning in a Material World*, TAN Books.

Daniel, Lillian (2014) *When "Spiritual but Not Religious" Is Not Enough: Seeing God in Surprising Places, Even the Church*, Jericho Books.

Erlandson, Sven (2000) *Spiritual but Not Religious: A Call to Religious Revolution in America*, Iuniverse Inc.

Fuller, Robert C. (2001) *Spiritual, but not Religious: Understanding Unchurched America*, Oxford University Press.

Funk, Cary, and Greg Smith (2012) “Nones’ on the Rise: One-in-Five Adults Have No Religious Affiliation”, *Pew Forum on Religion & Public Life*.  
<<https://www.pewforum.org/2012/10/09/nones-on-the-rise/>>

Maslow, A. H. (1943) “A Theory of Human Motivation,” *Psychological Review* 50, pp.370-396. <<http://psychclassics.yorku.ca/Maslow/motivation.htm>>

McCarroll, Pam, Thomas St. James O’Connor, and Elizabeth Meakes (2005) “Assessing Plurality in Spirituality Definitions,” in Augustine Meier et al. (eds), *Spirituality and Health: Multidisciplinary Explorations*, Wilfrid Laurier University Press, pp.43-59.

Mee-Chapman, Rachele (2016), *Relig-ish: Soulful Living in a Spiritual-But-Not-Religious World*, Chalice Press.

Mercandante, Linda A. (2014) *Belief without Borders: Inside the Minds of the Spiritual but not Religious*, Oxford University Press.

Parachin, Victor (2014) *How To Be Spiritual But Not Religious: 108 Pearls of*



*Eastern Wisdom*, Branden Books.

Peterson, Christopher (2013) *Pursuing the Good Life: 100 Reflections on Positive Psychology*, Oxford University Press.

Pew Research Center (2012), “Nones” on the Rise: One-in-Five Adults Have No Religious Affiliation”, *Religion and Public Life*, October 9.

<<https://www.pewresearch.org/wp-content/uploads/sites/7/2012/10/NonesOnTheRise-full.pdf>>

Pew Research Center (2019), “In U.S., Decline of Christianity Continues at Rapid Pace”, *Religion and Public Life*, October 17.

<<https://www.pewforum.org/2019/10/17/in-u-s-decline-of-christianity-continues-at-rapid-pace/>>

Sacchi, Tina (2013) *My Spirit Is Not Religious: A Guide To Living Your Authentic Life (A SBNR or Spiritual But Not Religious Book)*, Morgan James Publishing.

Taylor, Francis (Kindle), *How to Meditate: Spiritual But Not Religious: Meditation Techniques for Beginners Gurus and People Who Get Stuck*, Francis Taylor.

Wikipedia “Mindfulness”. <https://en.wikipedia.org/wiki/Mindfulness>; accessed on 2019/11/5.

Wikipedia “Relationship between religion and science”. [https://en.wikipedia.org/wiki/Relationship\\_between\\_religion\\_and\\_science](https://en.wikipedia.org/wiki/Relationship_between_religion_and_science); accessed on 2019/11/5.

Wikipedia “Self-actualization”. <https://en.wikipedia.org/wiki/Self-actualization>; accessed on 2019/11/5.

Wikipedia “Spirituality”. <https://en.wikipedia.org/wiki/Spirituality>; accessed on 2019/11/5.

Wikipedia “Spiritual but not religious”. [https://en.wikipedia.org/wiki/Spiritual\\_but\\_not\\_religious](https://en.wikipedia.org/wiki/Spiritual_but_not_religious); accessed on 2020/6/10.